

しのぎまゐる 篠崎護の顕彰碑

ニュースレター#6*で日本人墓地公園内にあるメモリアルプラザをご紹介しますと、史蹟史料部に問い合わせが相次ぎました。

「篠崎護さんのお墓は日本人墓地公園にあるのですか」

正直なところ、ニュースレター#6*はメモリアルプラザの位置とご寄付の銘版をご紹介しますために書いたもので、顕彰碑のお一人である篠崎護については、お名前と役職を載せたのみでしたので、このお問い合わせは、全く予期せぬことでした。

そこで、今回は篠崎護と、ご遺族が日本人墓地公園にお越しくださった時の様子をご紹介します。



篠崎護の顕彰碑

篠崎は1908年福岡県生まれで、1932年に明治大学を中退し、日本電報通信社に入社。1934年に上海に派遣され、その後南京、漢口に移りました。1936年に外務省情報部嘱託としてベルリンに派遣され、1938年にシンガポールに転任しました。シンガポールでは日本総領事館嘱託の報道記者として東方通信社に勤務し、軍情調査や中国系住民社会に関する情報収集を行っていました。

1940年、英軍の将校からシンガポールの防備に関する情報を聞き出そうとするなど、スパイ容疑で英海峡植民地警察特高科に逮捕され、チャンギ刑務所に収監されました。

1942年に日本軍によって釈放され、占領時代は昭南特別市政庁の教育課長、その後厚生課長となり、市政庁の職員として占領行政に奔走しました。

1942年2月15日、日本軍はシンガポールを占領すると数日後に、親中国、新英国の華人を狩り出し、多数の若者を虐殺しました。そうした状況下で篠崎は、カトリックの司教と協力して数多くのカトリック教徒を肅清場所から逃したり、抗日活動に関わっていないと証明する2万通〜3万通の特別許可証を発行し、市民を保護しました。そのことから、彼は日本のシンドラーと呼ばれていました。

戦後、日本の船舶が再びシンガポールに寄港したのは1951年のことでした。その「信洋丸」を東洋汽船からチャーターし、日本製セメントをシンガポール港に陸揚げしたのが篠崎でした。

篠崎には上陸は許されず、船に留まりましたが、連日100人を超す華人が彼を訪問したことがストレイツ・タイムズに「Shinozaki Comes Back Singapore」と報じられたといひます。



Mamoru Shinozaki
The Japanese Scholar
Mamoru Shinozaki, often described as the "Japanese Schindler", was instrumental in saving many lives in Singapore immediately after the surrender of the British on 15 February 1942. Shinozaki worked with the Catholic Bishop in Singapore, Adrian Dewailly, to gather a number of Catholics from the so-called "clean-up operation"

assembly points and take them to a church where they were subsequently released.¹² He also issued between 20,000 and 30,000 "protection cards" to people. This was a card with a stamp saying "Special Foreign Affairs Officer of Defence Headquarters", each card stating that the bearer of the pass was a "good" citizen and requesting Japanese soldiers to "please look after him and protect him". According to Shinozaki, these cards were issued to "everyone asking for them" and he "gave hundreds to no attempt to find out whether the cards went to communists or anti-Japanese elements or bad hats."¹³ He was just intent on saving lives.

Shinozaki helped set up the settlement of Endau, in nearby Johor state, for the Chinese, then three months later, Baku for the Chinese. He visited both settlements regularly and many settlers in Baku have fond memories of him. However, in spite of the good Shinozaki did and charged him with espionage together with other Japanese officials he had been similarly charged with espionage by the British before the war. See Note 45.

Shinozaki was held briefly at the British Field Security Force headquarters at Balmoral Road in Singapore until some Baku residents, along with other civilians, petitioned the British and secured his release. Shinozaki subsequently worked for the British army as an interpreter and served as a key witness, providing evidence for the war crimes trials held in Singapore against the Japanese soldiers involved in Operation Sook Ching.

His grandfather, Herman de Souza Llori, who worked with Shinozaki in the Education Department during the what Shinozaki said to him in 1942, "I was in the diplomatic service of the Japanese. I was trained in Germany, and I had great ambitions. I was going to rise in the consular world. But when I had time to think, and I have now only one ambition... My ambition now is to do good to people. Doesn't matter who they are."

After the war, a letter published in The Straits Times on 19 August 1946 made the case for allowing Shinozaki to stay in Singapore. The writer of the letter was my great-uncle in F. (Dell) de Souza, a lawyer who personally knew Shinozaki through his practice in Singapore before the war, and later during his internment in Baku. He closed his letter by saying: "I do feel that Shinozaki's public spirit, nobility and achievements - at a time when we who were there were subjected to all kinds of degradations - characterize him as a great humanitarian and a great gentleman."

日本人墓地公園の顕彰碑に問い合わせが相次いだと同時に、史蹟史料部はもう一件、篠崎護に関する問い合わせを受けました。

「担当者様

日本人墓地公園のニュースレターで篠崎護の碑文を拝見しました。そちらに、篠崎護のお墓はあるのでしょうか。また、ご遺族の方とは連絡がとれるのでしょうか。

篠崎護は私の大伯父にあたります。シンガポール国立博物館経由で著作権についてのお尋ねがありました。直系ではないので、お答えすることができない状況です。

現在、マレーシアに在住しております。国境も開きましたので、シンガポールを訪問したいと思っております。」

残念ながら日本人会には、篠崎氏が日本に戻って以降1991年に亡くなるまでの記録は何も残されていません。戦後にシンガポールを引き上げられた方々が日本に戻られてからのご連絡先は、ご遺族のそれを含めてここには残されていないのです。

しかし昨年か日本人墓地公園のツアーをご案内されている杉野元事務局長は、メモリアルプラザに顕彰碑を建てたご本人であり、篠崎氏本人には会っていないものの、同じ時代を生きた越後屋の福田庫八氏から彼の話聞いていたそうです。

2月8日(水)、篠崎氏のご遺族である菅原様が日本人墓地公園にお越しになり、杉野元事務局長がお話をされました。

菅原様の母方の祖母が篠崎氏の妹にあたるようで、1991年に大阪で篠崎氏が亡くなられた際には、お母様は篠崎氏の亡くなる直前に会いに行かれたそうです。今回、日本人墓地公園に篠崎氏の顕彰碑があることを知り、お母様は大変喜ばれたそうですが、90歳を超え来星は叶わず、隣国マレーシア在住の菅原様に託されました。

菅原様がお持ちの『シンガポール占領秘録一戦争とその人間像』には、著者である篠崎氏ご本人のサインが記されていました。



篠崎氏の顕彰碑をお参りいただきました

終戦から78年、戦時中当地に滞在していた人の多くがこの世を去り、その当時の話を伝え聞いたご遺族も少なくなってきた昨今、日本人墓地公園に所縁のある方も減りつつあります。

日本人墓地公園は花と緑あふれる憩いの場としてシンガポールの地元の皆様にご来園いただいておりますが、在留邦人の皆様、ご旅行で来られる方に歴史を伝える場として、管理を続けて参ります。

参考文献:「シンガポール日本人社会百年史 - 星月夜の耀一」シンガポール日本人会 2016年12月23日発行

*ニュースレター#6は上記QRコードよりご覧いただけます。

ニュースレター
掲載ページ

